

展 望

スチューデント・アパシー研究の展望

下山 晴彦¹

A REVIEW OF STUDIES ON STUDENT APATHY

Haruhiko SHIMOYAMA

The term "Student Apathy" was originally proposed in US to describe the male university students who continued to avoid confronting their conflicts. However, it has been studied and conceptualized only in Japan. The primary purpose of this paper was to review the studies on the disorder of Student Apathy and make clear the points of controversy. At first, the trends in conceptualizations were considered from an historical point of view. It was found that the concepts suggested thus far, were so various that it was difficult to categorize the disorder as a clinical entity. Next, the studies were examined from a psychopathological and developmental point of view. It was suggested that the disorder level should be shifted from neurotic to personality disorder and the integrated concept should be formed to distinguish it from generally apathetic tendency found in adolescence in Japan, which should be searched as a background of Student Apathy.

Key words : student apathy, male university students, clinical entity, personality disorder, adolescence in Japan.

大学生の留年は、自己確立のための猶予期間としてのモラトリアムと見ることもできる。しかし、留年学生の一部には、単なるモラトリアムではなく、学業に対して慢性的な無気力状態に陥り、関係者の警告にも拘わらず、休学、留年を繰り返す、結局は退学になっていく場合がある。具体的には、真面目な男子大学生が、ある時から急に授業に出席しなくなり、学業に関する意欲を失い、試験を受けない(受けられない)状態が慢性化する。しかも、妄想、抑うつ、不安などの顕著な精神症状が見られず、本人も自らの状態を深刻にとらえることができないので、一見すると“さぼり”や“怠け”と見間違われる。しかし、その無気力状態を自らの意志で改善することは全く不可能であり、単なる怠け、さぼり、あるいはモラトリアムといった一時

的な不適応状態とは異なる。

このような現象は、1960年代より全国の大学の学生相談・精神保健関係者によって高学歴社会の新たな青年期障害として注目を集め、当初は「意欲減退学生」との名称で現象の記述研究がなされていた。その後、Walters (1961) の邦訳を契機に「スチューデント・アパシー」(Student Apathy : 以下, S・A) との名称が定着し、障害概念に関するさまざまな議論が広範囲で行われるようになり、今日に至っている。

しかし、障害の概念に関しては、個々の論者によって状態像、形成因、障害レベル等の基本的側面で相違が見られ、分類基準の混乱が見られる。しかも、分類基準が未確定にも拘わらず、下位分類の提案や大学生以外への適用の拡大などがなされ、さらに概念の混乱が進むといった事態となっている。そこで本研究では、S・Aの研究状況を展望し、混乱したS・Aの概念を整理し、統合的な概念の構成に向けての今後の課題と研

¹ 東京大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education The University of Tokyo)

究の方向性を明らかにすることを目的とする。

なお、筆者は、S・A の概念の混乱には2つの次元が関わっていると考える。第1の次元は、時代の経過のなかでさまざまな研究者によって異なる概念や研究が示されてきたことによる混乱である。第2の次元は、S・A の障害自体に内在する多面的性質の表われとしての混乱である。両次元を同一枠内で論じることは、混乱している概念をさらに混乱させる可能性がある。そこで、本研究では、両者を研究1と2に分けて論じることとした。研究1では、これまでになされてきた研究の歴史を記述し、概念の混乱を整理することで第1の次元の問題点を明らかにする。研究2では、関連領域からのアプローチを紹介し、さまざまな視点からS・A の障害の多面的性質を指摘し、第2の次元の論点を明らかにする。

1. 研究1

1. はじめに

S・A は、産業構造の変動に伴う社会の高学歴化と密接な関連が推測される障害である。その点で社会・歴史的な背景を考慮に入れる必要がある。また、S・A の基本概念が米国での研究の影響を受けて形成されていることから、米国の研究状況も視野に入れる必要がある。

そこで、社会・歴史的背景および米国との比較を考慮した時代区分を行った上で、歴史的経過に沿って研究の整理、検討を行う。

2. 1960～70年代前半：日本

1950年代後半から始まった経済の高度成長に伴い1960年代には大学進学率が上昇し、これまでにない大量の学生が大学に入学するようになった。このような社会状況のなかで1964年に国立大学教養学部的大量留年が明らかとなったのを契機として大学生の留年の増加が社会問題化した。丸井(1967, 1968)は、留年の類型化を行うなかで「みずからも明らかに扱えられないような空虚感や無感動」を示す一群の留年生が見られることを指摘し、これを「意欲減退」型留年とした。

この大学生特有の意欲減退は、その後遠藤(1972)、土川(1974)、山本(1975)等の大学の学生相談や精神保健の専門家により取り上げられ、次第にその問題の拡がりが見られるようになった。しかし、いずれも部分的特徴の指摘に止まり、概要に関する系統的記述は見られず、障害の全体像は不明のままであった。

なお、この時期は大学生の留年とともに中高校生の不登校の増加も見られた。辻(1973)は、これらの新た

な現象を青年期の主体の退去との観点から時代背景を交えて論じている。

3. 1960～70年代前半：欧米

Walters (1961) は、ハーバード大学保健センター精神科医としての臨床経験をもとに一般学生の一過性無気力とは異なる、独特な無気力状態を慢性的に呈する一群の学生の存在を指摘し、それにS・A との名称を与えた。彼は、TABLE 1 にまとめたように、その特徴と成因に関して系統的な記述を行い、他の診断分類との鑑別の基準を示し、独自の臨床単位としての可能性を示した。TABLE 1 の(a)で示される状態像は、1960年代から日本で注目され始めていた意欲減退型留年学生の特徴と一致しており、同様の不適応状態を扱っていることが認められる。(b)(c)は心理力動、(d)(e)は成因についての記述である。(f)の障害レベルに関しては、「抑うつ」「分裂病質」との鑑別にも言及している。

大学生に特有な無気力に関連する論文としては、米国では Halleck (1967)、Teicher (1972) が「疎外された (alienated) 学生」との表現を用いた研究を行っている。しかし、いずれにおいても Walters (1961) の引用は見られない。Farnsworth (1973) は American Handbook of Psychiatry で S・A に触れているが、その内容は Walters (1961) の要約であり、それ以外の関連研究の引用は見られない。また、Meyersohn (1974) はアパシー現象について精神医学、心理学、社会学等の幅広い視点から概観しているが、S・A に関する言及は見られない。さらに、Blaine (1973)、Perkins (1975) は student apathy という語を用いて1970年代の大学生

TABLE 1 Walters のスチューデント・アパシー概念の要点

- | |
|--|
| (a)情緒的動きの減退、無気力、無関心、知的無力感、肉体的気怠さ、空虚感、情緒的引き籠もり、社会参加の欠如が見られる。 |
| (b)無関心は予期される敗北、屈辱、制限に対する心理的恐怖を避ける行動である。 |
| (c)攻撃性や競争的衝動のために他人を直接傷つけることを避けるための防衛である。ただし、回避によって他者をどうしようもない状況に陥れて攻撃衝動を満たす。 |
| (d)男らしさ形成をめぐる解決しがたい葛藤のため青年期を遷延させている男性の青年期発達の障害である(青年期後期、特に大学2年時に生じやすい)。 |
| (e)価値の尺度を学業達成だけに限定したことの結果生じたものである。 |
| (f)恐怖状況が解決されれば元に戻るものと、長期間続くものがある。しかし、いずれも精神病に近づくことはなく、神経症に近い。 |

の特徴を論じているが、それはベトナム戦争や対抗文化の影響を受けて当時米国の大学生全般に広がっていた無気力傾向を扱ったものであり、Waltersの示した特異的障害をもつS・Aとは全く異なる意味であった。

このようにWalters(1961)以後S・Aに関する研究の展開が見られなかったことから、S・Aが米国社会において注目を引くほどの広がりを見せなかったことが推測される。なお、米国以外では同様の現象を主題として扱った論文は見受けられない。笠原(1978)も同様の指摘をしており、S・Aは米国と日本でのみ見られた特異的な現象といえる。

4. 1970年代後半：日本

Walters(1961)は、名古屋大学保健管理センター精神科医であった笠原嘉らによって1975年に邦訳された。早い時期から独特の意欲減退を示す男子大学生の存在に気付いていた笠原(1973)は、Waltersの概念を援用して日本の大学生の無気力に関する概念の明確化を行い、わが国にS・Aという名称を定着させた。TABLE 2は、笠原(1976, 1977, 1978, 1981, 1983)、笠原・成田(1979)の一連の論文で示されたS・A概念の要点である。TABLE 2の(a)(b)(c)は、状態像についての記述である。これらは、Waltersの概念を新たな専門用語で解説し、その独自性を明確化したものである。特に笠原(1981)においてアンヘドニアという特殊な心理状態が症状の基本にあることが示され、それによってS・Aが不安、抑うつ、離人感、焦燥、苦悩といった自我異質的状态とは異なる独特な自我親和的心理状態にあることが明確化された。

笠原のオリジナリティは、(d)の成因に関して病前性格に強迫性があるとの視点を導入したことである。既述したようにWalters(1961)は、攻撃衝動に注目し、エディプス葛藤を形成因とした。それに対して笠原(1976, 1977, 1978)は、強迫性に勝ち負けへの敏感さが加わることで失敗や批判を部分退却で回避するS・A特有の行動が生じるとの病前性格論を展開した。このように笠原の概念では、攻撃性でなく強迫性に重点が置かれている。これは、Waltersとの論点の相違というの

TABLE 2 笠原のスチューデント・アパシー概念の要点

- (a)アイデンティティの葛藤と進路の喪失が見られる。
- (b)心理状態としてアンヘドニア(快体験の希薄化)が見られる。
- (c)本業領域からの部分的退却という陰性の行動化を繰り返す。
- (d)病前性格として強迫傾向、勝負過敏性が見られる。
- (e)新たな診断分類として退却神経症を提唱。ただし、軽度はパライローゼ群、重度はボーダーライン群とする。

ではなく、米国とは異なる日本独特のS・Aの特徴を示していると見ることもできる。

(e)の診断分類に関して笠原は、抑うつ、分裂気質、単純型分裂病との鑑別基準を指摘し、臨床単位としての可能性を追求している。病態水準については、神経性アパシー(笠原, 1973)からアパシー・シンドローム(笠原・成田, 1979)へと発表年代による移行はあるものの、基本的には神経症との立場をとる。しかし、下位分類に神経症と精神病の中間のボーダーライン群を入れる点(笠原, 1978, 1979)や回避性人格障害との共通性を指摘する点(笠原, 1981)は、神経症とする論理と矛盾する。

以上の笠原の概念化に対応して広瀬(1977)は若い社会人男性の逃避型抑うつをS・Aとの比較で論じ、岩井他(1977)、大井(1979)は児童の登校拒否にS・Aと共通する心性を指摘した。この種の研究は、S・Aの心性が大学生だけでなく、他の発達段階にも広がる裾野の広い問題を含み、日本の発達風土とも関連していることを示唆するものであった。

また、笠原の研究と並行して学生相談関係者(佐治, 1976, 細江他, 1977, 石井, 1979)によって事例研究がなされ、心理臨床的援助活動を通してその本態に迫ろうとする動きも始まった。なお、この時期は、1970年前後の学園紛争の嵐が収まり、学生の中にシラケと呼ばれた虚脱感が蔓延した時代でもあった。石井(1975)、細木(1976a, b)、鈴木(1978)は、この時代状況との関連も含めてS・Aを論じている。

5. 1980年代前半：日本

1980年代に入ると長谷川(1980)、国分(1980)、石井・笠原(1981)、土川(1981)、笠原(1984)の概説書や概説論文が出された。これは、初期研究が一段落し、概念の確認段階に入ったことを示す。また、それと並行して新宮他(1981)、島崎・竹内(1981)、岡庭(1983, 1984, 1985)らの大学精神保健関係者による地道な診断、類型化の研究が行われた。さらに、森岡(1981)、青木(1983)、三好(1983)、菅・大原(1983)は、心理療法経験に基づく考察を行っている。

このように1980年代前半は、研究段階としては笠原による研究が一段落し、そのまとめを行いつつ、次の展開に向けての準備をしていた時期である。時代としては、高学歴社会が定着し、キャンパスの症状群(笠原・山田, 1981)と呼ばれる大学生の心理的問題が世の注目を集めた時期であり、S・Aは、「大学大衆化時代の学生特有の無気力」(石井, 1980)として、大学関係者以外にも一般に知られるようになった。

6. 1970年代後半以降：米国

青年の異議申し立ての60年代の後の70年代は、逆に政治的関わりを含めて無気力が米国の青年の間に蔓延する時代となり、Student Apathy はもっぱらそのような青年一般の状態を表わす語として用いられた。Marcus & Richman(1977)は高校生のアパシーを、Altbach (1979)は大学生のアパシーを論じている。1980年代に入ると一般学生のアパシー傾向に関する調査研究がCoffield (1981), Coffield & Buckalew (1985, 1986)によって行われた。しかし、その調査におけるアパシーの概念は実存主義的理解に基づくものであり、Walters (1961)の概念とは異なる内容であった。

80年代の後半になると、Student Apathy は一般学生の授業への動機づけの低下に限定された意味で用いられるようになる。例えばRaffini (1986), Bishop (1989)は高校生の、またGimenez (1989), Cohen (1991)は大学生の授業意欲低下を、授業方法の改善を含めて論じている。この他、Taylor & Wolfford (1985)は身体障害の学生のアパシーを扱っている。

筆者の検索した限りでは、Walters (1961)はFarnsworth (1973)以外引用されておらず、したがってWaltersが提起した意味でのS・Aの概念のその後展開は見られない。また、Walters自身も、その後うつ病に関する論文(Walters, 1970)と大学保健におけるコンピュータ・ネットワークに関する論文(Robinson & Walters, 1986)を出しただけで、S・Aに関しての再論はしていない。因に大学の精神保健・学生相談の包括的研究書であるGrason & Cauley (1989)において、S・Aは項目として取り上げられていないだけでなく、索引にも載っていない。

このようにWaltersのS・A概念は、日本での急激な引用の増加と反比例するように米国では青年期研究からは全く姿を消してしまった。これは、Waltersの概念で提起された特異的障害を呈する大学生が、その後米国では問題となるほどは存在しなかったことを示すといえる。このような相違が生じた要因についての考察は、わが国の青年期の特色を考える上で重要な手がかりを提供すると思われる。

7. 1980年代後半：日本

この時期、米国ではWaltersの提起したS・A概念の指摘自体が消滅していたのに対して、わが国では、それまでの研究の蓄積を踏まえて独自の視点を盛り込んだ本格的な研究論文が多数出された。

山田(1984, 1987, 1989, 1990a, b)は、東京大学保健センターでの長年の精神科医療の経験に基づく論を展開している。TABLE 3はその要点をまとめたものである。

TABLE 3 山田のスチューデント・アパシー概念の要点

-
- (a)選択退却を主とする「静かなアパシー」と追い詰められて神経症状を呈する「騒々しいアパシー」がある。
 - (b)選択退却と完全退却は連続線上にあり、長期事例では相互に流動的となる。
 - (c)親(特に主導型の母親)に枠付けられた強者(秀才)アイデンティティの挫折が自己不確実を生じさせる。
 - (d)自己不確実が準備性となり、些細なことを引き金として退却を始める。
 - (e)成熟拒否に通じるSubclinicalな問題性格群である。
-

状態像に関して山田(1987)は、(a)(b)に示したように選択退却(笠原の部分的退却に相当)を主とする「静かなアパシー」と神経症状と退却を繰り返す「騒々しいアパシー」があるとしながらも、長期縦断的観察によれば、選択退却と完全退却は連続的で次第に神経症状と完全退却が繰り返し生ずるようになると指摘する。この点で、部分的退却を中核的特徴とする笠原の見解との相違が見られる。また、山田(1987)は、神経症状とアパシーを等価と見ており、S・Aを臨床単位と見る笠原の見解に懐疑的である。さらに、山田(1987, 1990b)は、(e)に示したようにS・Aを成熟拒否(山田, 1983)に通じるサブクリニカルな問題性格群と位置付けており、この点からも臨床単位とするのには消極的立場にある。ただし、上記山田の概念は明確にヒステリー反応と思われる症状も状態像に含めており、範囲を拡げ過ぎて逆にその輪郭を曖昧にし、臨床単位の可能性も消してしまっているとも見られる。

(c)(d)の形成因に関して山田(1987, 1989)は、Schneider (1950)の精神病質人格の概念を援用し、自己不確実者には強迫型と敏感型があり、敏感型が無力傾向を持つ時に退却するとの見解を示した。それにより、笠原が病前性格として1次的に重視した強迫性格を自己不確実の反映として2次的な状態に位置付け、笠原とは異なる見解を示したといえる。また、山田(1984, 1990a)は、家族関係を形成因として重視し、母親に取り込まれた母子関係が自己不確実の要因との見解を示している。これは、父親とのエディプス葛藤を重視したWalters (1961)とは異なる見解であり、文化差を考える上で注目される。

山田以外にも、長年の臨床経験に基づく独自の視点からの分析を行った研究が見られた。小野(1987)はユング心理学的視点から、池田(1988, 1989)は人間学的視点から、青木(1988)は文化論的視点から援助論も含めた事例研究を行っている。また山下(1990)は、大江健

三郎, 三好暁光, 河合隼雄の3氏のコメントを付した事例研究を行っている。

このように障害の分析が深められる一方で, S・A 概念の一般的普及に伴い適用が本来の特異的障害を示す大学生との限定を越えて拡大する現象が生じてきた。その場合, S・A のアパシーの部分にのみ注目し, 特異的障害を示さなくても, 無気力状態を呈する不適応であればアパシーという名称を付す傾向が見られた。例えば, 一般大学生のアパシー化に関しては土川(1985)が論じている。大学生以前の不適応をアパシー心理との関連を論じたものとしては, 浪人生を対象とした矢花(1986), 中・高校生の無気力を対象とした東京都立研究所相談部教育相談研究室(1987), 恐怖・強迫症状を伴う中・高校生を対象とした田中・笠原(1988), 不登校の分類研究である岡田他(1988)がある。成人期のアパシー心理に関しては, 山田(1986), 延島(1989)がまとめている。また, 初期の概念の提唱者である笠原(1988)は, S・A の特異的障害のひとつである部分的退却を軸とする退却神経症を新たに提案し, 登校拒否やサラリーマンの欠勤症を含む概念の拡大を試みている。

さらに, このような概念の適用の拡大は, アパシーの意味の拡大解釈にもつながった。稲村(1985, 1988)はアパシーを現代の若者心性にまで拡げて議論しており, 平井(1988)はアパシーシンドロームとしてあまりに多様な状態を包含させている。筆者は, 現代社会におけるアパシー心理の蔓延傾向は認めるが, このような拡大解釈はS・Aの概念を混乱させるおそれがあり, 安易な適用は避けるべきであると考えられる。

8. 1990年代: 日本

S・Aの基本的概念に関するコンセンサスが未形成にも拘わらず, さまざまな方向にアパシーの概念が拡大し, S・A概念そのものが拡散する傾向も生じてきた。そこで, 1990年代に入るとこのような傾向に対して土川(1990a)を始めとしてそれまでの論点を整理し, 概念の再検討を行う動きが出てきた。湊(1990), 松原(1993)は主要な論者の論点を整理し, 概念の混乱を指摘している。小田(1991)は用語の整理とこどものアパシー心理の概説を行っている。加藤(1990)は多数の自験例をもとに, また小川(1992)はナルシズム論の観点から臨床概念の再検討を行っている。さらに下山(1994b)は, 問題を行動, 心理, 性格の3次元に分けて, 整理, 検討している。

このような一連の概念の再検討において最も注目されるのは, 名古屋大学で長年学生相談を担当してきた土川(1989, 1990b, 1992)による新たな分類の提案である。

TABLE 4 土川のスチューデント・アパシー概念の要点

-
- (a)典型例には, 部分的撤退を単一に示すI型(受身回避型)と全体の撤退と部分的撤退が流動的で他の症状も複合的に示すII型(自己愛型)がある。
 - (b)II型は, I型に比べて重症であり, 現実検討力の水準は低く, 母子密着型が多い。
 - (c)典型例は, 否認や分裂の防衛機制に依っていることから人格障害の範囲内にある。
 - (d)典型例は, 発達段階での一過性のアパシー, 一般学生のアパシー傾向, 類アパシー群(神経症等におけるアパシー状態)と区別される。
-

TABLE 4は, その要点をまとめたものである。(a)(b)は状態像に関する下位分類であるが, これは上記笠原と山田の概念の統合を目指した内容である。(c)(d)の障害レベルに関しては, 笠原, 山田と異なり, 初めて人格障害との見解を示しており, それにより近接状態との区別を行っている。上述したように近年の概念の拡大解釈のために特異的なS・Aの状態と一般の青年のアパシー傾向とが混同される傾向にあったが, 人格障害としての位置付けを明確にしたことにより, その区別の可能性が示された。ただし, その人格構造については十分述べられておらず, 人格構造の解明は今後の課題である。

II. 研究2

1. はじめに

アパシー (Apathie, apathy) は, 語源はギリシャ語の pathos (passion) の欠如との意味であり, 一般的には感情や興味の欠如と定義される (Marin, 1991)。また, 精神医学用語としては, 無感情や感情鈍麻を意味し, 本来重症のうつ病, 精神分裂病, 脳器質疾患の症状とされた (新福, 1984)。それに対して Walters (1961) が, 男らしさの形成という青年期後期の課題に関して独特のアパシー状態を示す男子大学生が見られることを指摘し, これにS・Aとの名称を与えたことは研究1で既述した。このような経緯からS・Aの障害には, アパシーが本来もつ精神病理的側面と大学生の青年期課題と関わる発達心理的側面とが混在する多面性が認められる。そのため, S・Aの概念の混乱には, S・Aの障害自体に内在するこのような多面性が要因として関与していると考えられる。

そこで, 以下において精神病理学と発達心理学を中心とした関連領域からのさまざまなアプローチを紹介し, S・Aの障害に内在する多面性を指摘し, 論点の明

確化を試みる。

2. 障害論①—精神病理学理論—

精神病理学的アパシー概念に関しては、Marin(1990, 1991), Marin et al (1991, 1993) がアパシーを「情緒的苦悩, 知的損傷, 意識水準の低下に起因しないモチベーションの喪失」と定義し, 症候群としての可能性を検討したうえで評価尺度を作成し, 大うつ病やアルツハイマー病との異同を論じている。しかし, そこでは生活領域全般にわたるアパシーが扱われており, しかも対象が53歳以上の老人であることから, 部分的アパシーを示す大学生のS・Aとは異なる側面が多い。むしろS・Aは部分領域における特異的アパシー状態を示すことから, その特異性を明らかにする必要があると考えられる。なお, 英語圏以外では, Jacewicz-Kramarz・Warnecka-Przybylska(1982), Revers(1983) がアパシー状況を論じているが, 大学生の特異的アパシーは取り上げられていない。

Mundt (1983), Gibbons et al (1985) は, 精神分裂病の陰性症状としてのアパシーの重要性を指摘し, Grinker & Holzman (1973), Harrow et al (1977) は精神分裂病とアンヘドニアとの関連性を指摘している。また, Davison & Neal (1994) は, 精神分裂病の陰性症状をアパシー, アンヘドニア, アロギー, 感情の平板化の4症状としている。このようにS・Aの特徴とされるアパシーとアンヘドニアが精神分裂病の陰性症状として重要な意味をもつことから, 精神病理学的にはS・Aと精神分裂病の近縁性が推測される。しかし, Walters (1961), 笠原 (1978, 1979) は, 臨床経験に基づきS・Aの精神分裂病への移行はないとする。これは, S・Aにおけるアパシーは, 部分的アパシーであり, 精神分裂病における全面的アパシーとは質的に異なることによると考えられる。ただし, 笠原 (1973) は, 単純型分裂病との鑑別の問題や一時的に妄想状態を呈する事例の存在を記しており, また筆者の経験でも両者の区別が明確でない事例も見られる。したがって, 今後, 中安 (1990) による初期分裂病の研究等も踏まえて両者の区別の基準の確認作業をしておく必要がある。

抑うつとの鑑別に関しては, Walters (1961) はS・Aは「外界の愛情を掴み取ろうとせず, 外界を拒否する」点で抑うつとは区別できるとする。笠原 (1978, 1979) も, 同様の観点からS・Aは「愛の対象をもたない, 感情の言語化ができない, 治療の動機づけがない」といった点で特異的であるので, 両者の区別は可能であると

このような特異的アパシーを示すS・Aの臨床単位

としての可能性について Walters (1961) や笠原 (1978, 1979) は積極的である。蔭山 (1988), 大井 (1990) も同様の観点から概念のまとめを行っている。それに対してS・AをDSMで分類した場合, 新宮 (1981) は7カテゴリー (DSM III) に, 湊 (1990) は10カテゴリー (DSM III R) に分散すると述べており, 単位としてまとめることの難しさを示唆している。既述したように山田 (1987, 1989) は, 臨床単位の確定には消極的である。このように臨床単位に関する見解が別れるが, いずれも臨床概念としての有効性を認める点では一致している。したがって臨床単位となるか否かは別としても, 特異的障害を示すS・Aの統一的定義を構成することは当面の課題である。

3. 障害論②—パーソナリティ論—

Walters (1961), 笠原 (1978, 1979) は, 精神分裂病よりも分裂病質 (シゾイド) との鑑別に注意を払っている。これは, S・Aを精神病の次元よりもパーソナリティ (人格) の偏りの次元と見ていることを示唆する。ただし, 両者ともにS・Aには分裂病質のような人間への深い不信感や冷たさがないので鑑別は可能とする。

しかし, S・Aの特異的障害であるアンヘドニアに早い時期に注目したGlauber (1949) はアンヘドニアと分裂病質の関連性を指摘し, 近年の人格障害研究をまとめたKantor (1992) もDSMの分裂病質人格障害の特徴としてアンヘドニアと対人回避を挙げている。また, 笠原・三好 (1981) によれば, 回避性人格と分裂人格とは共通の根をもつ人格傾向とされる。このようにS・Aの特異的障害であるアンヘドニアや対人回避と分裂病質との間で関連性が見られることから, 分裂病質とS・Aの類似性は一概に否定できないと考えられる。

笠原 (1981) は, 部分的退却, つまり回避行動というS・Aの特異的障害との共通性からS・Aと回避性人格障害との類似性を指摘している。Walters (1961), 山田 (1987) はS・Aの恐怖症的な心性を指摘しているが, Schneier et al (1991), Widiger (1992) は回避性人格障害と社会恐怖 (social phobia) との関連性を指摘しており, この点からもS・Aと回避性人格障害の類似性が確認される。この他, 山田 (1984) はS・Aのヒステリー心性を指摘し, 広瀬 (1977) もS・A類似の逃避型抑うつ of ヒステリー心性を指摘している。また, 土川 (1990) はS・Aの典型例を人格障害レベルと位置付け, その一部には自己愛型人格で境界例人格障害と重なるタイプがあるとする。したがって, 演技性人格障害, 自己愛性人格障害, 境界例人格障害との異同も検討する必要がある。

以上見たように S・A は、人格障害との間でさまざまな共通性が推測される。そこで、臨床概念として人格障害レベルに位置付け、その人格構造を明らかにしていく作業が今後必要となると考えられる。

4. 発達論①—精神分析的発達論

S・A の発達面での特異的障害としては、青木 (1988) の強調する大人への構造転換ができないことが第 1 に挙げられる。この特異的障害に類似した状態を示す概念としては、Blos (1962, 1979) の「遷延された思春期 (Prolonged adolescence)」がある (* Blos は青年期中期つまり思春期を固有の青年期とするので、ここでは adolescence を思春期と訳す)。職業等の選択を回避し、青年期後期への進展を中断する男子青年の障害である「遷延された思春期」では、葛藤緊張の回避や空虚感が見られるとされる。このような点は、S・A の状態像と重なる。また、Walters (1961) も S・A を「青年期を遷延させている男性の発達障害」としており、共通性が見られる。しかし、Walters は形成因を父親とのエディプス葛藤とするのに対し、Blos は母親の成功空想への同一化による父親との競争の早期放棄としており、この点では異なっている。

また、遷延された思春期と同様に大人への構造転換ができない状態を示す概念として分析心理学 (例えば、van Franz, 1982) の「永遠の少年 (puer aeternus)」があり、樋口 (1980) は S・A と永遠の少年の共通性を指摘している。

遷延された思春期、永遠の少年の両概念は成人への構造転換がなされない点で S・A と共通しているが、さらに「自己愛」という点でも共通性が見られる。Blos は、遷延された思春期の自己愛的防衛を指摘し、それが固定化した場合には自己愛的人格障害につながる。また織田 (1986) は、永遠の少年は自己愛人格障害に合致すると述べている。自己愛については、小川 (1992) が自己愛の観点から S・A の特異的障害を分析しており、自己愛を介して両概念と S・A の関連性が推測される。

しかし、遷延された思春期も永遠の少年も思春期的な万能感と多彩な想像性を有しているのに対して、S・A は独特の無気力と引きこもりを示し、両概念で見られるような活動性を示すことはない。この点で、S・A は、両概念とは異なる特異な発達障害と見ることもできる。

5. 発達論②—アイデンティティ論—

Erikson (1959) の「アイデンティティ拡散」の概念には、時間的展望の拡散、勤勉さの拡散といった状態が

含まれており、S・A の状態像と重なる側面がある。しかし、アイデンティティ拡散には絶望感、苦悩、恐れといった心理的混乱やアイデンティティ意識の過剰が伴われていることが前提となっている。それに対して、葛藤場面を回避し続ける S・A にはこのような心理的葛藤がないことが特徴でもあるので、両者は異なった状態といえる。実際、S・A は、DSM III R のアイデンティティ障害の記述には当てはまらない。また、「心理・社会的モラトリアム」についても、Marcia (1966) の概念化にみられるように積極的な役割実験を伴っていることが前提とされるので、S・A には当てはまらない。

S・A は、行動面では学業回避等の不適応を示しながら心理面では適応意識が強く、明確な心理的混乱を継続的に示すことはない。しかも、アイデンティティの確立を目指すといった意識そのものが欠如しており、自我の再体制化という青年期課題に着手以前の状態に留まり続ける。したがって、アイデンティティの危機という心理的混乱を経ての自我の再体制化を前提とするアイデンティティ概念では、厳密な意味で S・A の本態をとらえきれない。むしろ、S・A が日本特有の青年期障害であることを考慮するならば、行動的混乱を示しつつも適応状態に固執し続ける S・A の特殊性を、受動的適応を重視する日本独特の青年期発達との関連で検討する必要があると考えられる。

この点に関しては小此木 (1979) が Erikson の概念とは異なる日本特有の受動的青年期を表わすモラトリアム概念を提案し、下山 (1992) は日本独特のモラトリアムが見られることを実証的に示している。このような日本特有の青年期発達の枠組みとの関連で S・A の検討を行うことが今後の課題である。

6. 発達論③—進路発達理論—

笠原 (1978) も指摘するように S・A は、単に学業場面を回避するだけでなく、進路喪失つまり職業の未決定を伴う。しかも、それは、進路決定そのものを回避する全面的な職業未決定である。ところが、Osipow et al (1976), Holland & Holland (1977), Holland et al (1980), Slanley et al (1981) 等の米国の職業未決定の研究には、S・A で見られる全面的な職業未決定状態は想定されていない。これは、職業決定を個人の最も重要な意志決定とし、高校時代の主体的な進路決定を重視した大学選択を前提とする米国の進路発達過程では、自己の進路について全く考えられない大学生は想定外であるためと考えられる。それに対して日本の青年は、松原 (1980) が「管理された予期的社会化」と呼んだ進

学システムに児童期より組み込まれており、そこでは下山(1982, 1983, 1984)が実証的に示すように主体的な決定よりも成績や社会的評価或いは教師や親等の周囲の期待が重視される非常に特殊の進路発達過程となっている。したがって、S・Aの進路発達を検討する際には、このような日本の特殊性をまず考慮しなければならない。

S・Aが、日本の大学進学率が上昇した1960年代後半より問題化し、進学競争の激化、組織化、早期化の進行とともに深刻化していることを考えるならば、S・Aの社会・文化的背景として進学受験に偏重した進路発達の問題は重要と考えられる。個々のS・Aの事例研究だけでなく、その背景にある進路発達状況を明らかにし、それとの関連でS・Aの障害の意味を検討することも今後の課題である。

7. 認知・学習理論

わが国では、波多野・稲垣(1981)、水口(1985)、坂野(1989)、宮田(1991)、桜井(1995)等が、Seligman(1975)の学習性無力感(learned helplessness)の研究を始めとする認知・学習理論の研究成果に基づき、無気力の形成とそれへの対処法について論じている。上記著作のほとんどがS・Aに言及しており、学習性無力感とS・Aとは何らかの関連性があることが推測される。

ただし、学習性無力感は、うつ病類似の概念であり、厳密な意味ではアパシーとは異なる状態である。また、そこで扱われる無気力の概念は、やる気のなさといった一般的な状態との連続線上に位置付けられており、S・Aの特異的障害とは異なる次元の概念である。したがって、認知・学習理論は、S・Aの構造や形成因を特定化するために特に有効というわけではない。しかし、統制感、効力感、内発的動機づけ、原因帰属といった概念は、S・A形成の背景に関する一般的な説明概念としては有効な視点を提供するものと考えられる。

III. 討 論

1. 統合的概念の構成

研究2で見たようにアパシーは、本来の精神病理学的意味としては非常に重い障害の症状を示す概念であった。ところが、Walters(1961)によりスチューデントと結合され、大学生の特異的障害を表わす語として転用されたことで意味の変質が生じた。その後、日本に移入され、研究1で見たように概念内容について研究者間での一致がないまま、概念の展開が見られた。そこで再び、アパシーの部分のみがS・Aから切り離され、大学生対象との限定を離れて広範囲の年代の不適

応を示す語として拡がりつつある。このような適用の拡大は、意味の拡散を伴っているため、S・Aの概念がそれによってさらに混乱する可能性が強い。

そこで、アパシーの意味の拡散を防ぐためには、S・Aの統合的概念を構成し、アパシーの特異的障害の核となる概念を明らかにする作業が必要となる。核となる概念が明確であれば、意味の拡散を生じさせずに大学生以外に適用範囲を拡げ、概念を拡大することも可能となる。この点に関して筆者は、S・Aの障害レベルを人格障害と診ているので、特異的障害の核として人格構造を明らかにしていくことが重要と考える。

S・Aの特異的障害を統合的に包含する統合的な概念を構成する際には、研究2で示したS・Aの障害に内在する多面性をいかに概念に統合するかが重要となる。というのは、S・A概念の混乱は、S・Aの障害に内在する多面性に由来していると推測されるからである。したがって、多面性を取り入れた統合的な概念を構成することが今後の重要な研究課題である。この点に関しては、下山(1995a)がS・Aの多元的構造モデルを提案しており、具体的方向性を示すものとして注目される。

なお、研究2で見たようにS・Aは他の障害と重複する側面が多いので、統合的概念の構成に際しては明確な分類基準を備えた操作的定義を作成する必要がある。

2. 援助論

研究1で示した各論者の概念において、S・Aの特異的障害として、困難場面の回避(退却、撤退)行動が見られるとの点では一致が見られていた。このような回避傾向が強いため、S・Aは、困難な状況に陥っても自発的来談は稀であり、関係者に指示されての来談がほとんどである。また、来談しても困難な状況を否認し、現実を回避し続けるので、伝統的な心理療法モデルによる対応では来談継続が困難となる。その結果、面接で得られるデータは少なく、しかも現実回避しているために観察で得られるデータも限られる。統合的概念が形成できない理由のひとつに、このデータの少なさがある。つまり、データが限られるため、論者の対応や視点によって見解が異なったものとなっている。したがって、統合的概念の構成や人格構造の解明のためには、まず適切な援助方法を開発し、具体的データを収集することから始めなければならない。

S・Aの援助技法を論じている研究には、以下のものがある。Walters(1961)、佐治(1976)は、受動的攻撃性に巻き込まれないことの重要性を指摘する。また具体的視点として笠原(1977)は伯父一甥的な斜めの関係で

適切な距離をとること, 土川(1981, 1990, 1992), 林(1990)は根気強く関係をつなぎつつ現実的なサポートを行うこと, 青木(1988), 峰松(1990)は援助者が社会的常識に捉われないこと, 青木(1989), 山田(1990)は家族の参加を求めること, 松原(1985a, b, 1990, 1992)は具体的行動の調整を行うことを指摘する。

これらは, いずれも有効な指摘であるが, S・Aの全体構造との関連が明らかでないため, 対処法としての意味合いが強く, 系統的な方法論の展開となっていない。それに対して下山(1994a)は, S・Aを「悩めない」障害として, その構造に基づき, つなぎモデルという系統的な援助方法論を開発している。今後は, このようなS・A独自の人格構造や防衛機制を踏まえた上で, 系統的な援助技法の展開が必要である。

S・Aの事例研究のような実践型研究では, 実践方法の改善により, 新たなデータが得られて研究が進み, 対象の構造が解明され, さらにそれにより系統的な実践方法の開発が進み, 対象の全体構造が明らかになるという循環的な関係で(援助)実践と(分析)研究が進む。したがって, S・Aの統一的概念の形成には援助技法の開発が前提となる。

3. 社会・文化論

研究1で見たようにS・Aは, 米国ではその後全く注目されなかったのに対して, 日本では数多くの研究がなされている。このような相違が生じた要因として, 研究2で指摘したようにS・Aが日本の社会・文化と密接な関連性をもつ障害であることが推測される。したがって, S・Aの背景となっている社会・文化的特徴についての研究も今後必要となる。社会・文化的側面としては, 以下の3点が考えられる。

第1点は, 教育システムの側面である。留年に寛容な日本の大学環境の影響も大きいと考えられる。しかし, 早期からの進学競争を内包する教育システムは, 深谷(1990)が示すようにこどもを含めて日本人の心性に何らかの無気力を生み出していると考えられる。第2点は, 親子関係の側面である。山田(1984, 1990a), 小川(1992)は, 日本の事例の場合は, Walters(1961)とは異なり, エディプス葛藤以前の母子関係の問題が要因であるとの見解をとる。母性社会(河合, 1976)といわれる日本の親子関係の在り方とも関連しており, 注目される点である。第3点は, 青年期発達の側面である。小此木(1979)が日本特有のモラトリアムを概念化したように日本の青年期は, Erikson(1959)がアイデンティティの発達として示したのとは異なる発達様相を呈しており, それがS・A形成に関連するとの考えである。

これは, 上記進路発達の問題とも重なる点であり, S・Aの背景として日本の青年期発達の特殊性を見ていく必要があるといえる。

4. 実証性の問題

単なる少数事例の記述に基づく臨床的推論ではなく, 10以上の事例の具体的データを比較可能な形で提示したうえで議論している研究は, 岡庭(1983), 加藤(1990)だけである。また面接や観察によるデータだけでなく, 投影法等の検査データに基づく推論をしている研究も少ない。例えば, ロールシャッハ・テストのデータに言及している研究は, 島崎・竹内(1981), 岡庭(1985), 矢花(1986), 土川(1988)のみである。調査型研究については, 上地(1979), 田中他(1990)が質問紙法を用いているが, 信頼性, 妥当性の検討がなされておらず, 方法論的に問題がある。また, 鉄島(1993)は質問紙法で, 楡木(1993)は調査型面接法で一般学生のアパシー傾向を調査しているが, 障害としてのS・Aと一般のアパシー傾向との区別がなされていない点で問題がある。

このように適切な実証性を備えた研究が少ないのは, 操作的定義が未構成なために研究としては探索的段階に留まらざるをえないことによると考えられる。つまり, 研究段階としては, 臨床的事例研究における個々の論者の臨床経験に基づく臨床像の推論的提示の段階(仮説生成段階)に留まり, 仮説(モデル)の妥当性を組織的に検討する検証的段階に到っていない。そこで, 今後の研究の課題としては, まず実践型研究を通して仮説(モデル)である操作的定義を構成し, そのうえで検査データを含めた複数の事例の実証的データに基づく仮説検証的研究を行うことである。また, 調査型研究については, 構成された操作的定義に基づき, 障害としてのアパシーと一般のアパシー傾向を区別した上で, 両者の関連性の検討を行うことである。それにより, S・Aの障害形成の背景となっている青年期一般の状況を実証的に検討することが可能となる。この種の研究としては, 下山(1995b)のS・Aの多元的構造モデルの心理障害と一般大学生の無気力の関連性を検討した下山(1995a)があり, 今後の研究のひとつの方向性を示す例といえる。

引用文献

- 青木健次 1983 無気力学生を巡って 一駆け出しカウンセラーの走り書き— 京都大学学生懇話室紀要, 13, 8—20.
青木健次 1988 スチューデント・アパシーの心理療

- 法 —イニシエーション図式を超えて— 京都大学学生懇話室紀要, 18, 1—52.
- 青木健次 1989 スチューデント・アパシー, 境界例, 家族療法的視点 石川元(編) 境界例 金剛出版 Pp.124—148.
- Altbach, P.G. 1979 From revolution to apathy —American student activism in the 1970s—, *Higher Education*, 8(6), 609—626.
- Bishop, J.H. 1989 Why the apathy in American high school ?, *Education Researcher*, 18(1), 6—10.
- Blaine, G.J. 1973 Student apathy—1970's style. *Journal of the American College Health Association*, 21(3), 188—189.
- Blos, P. 1962 On Adolescence —A Psychoanalytic Interpretation—. Free Press. (プロス野沢栄司(訳) 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- Blos, P. 1979 Prolonged Male Adolescence —the formulation of a syndrome and its therapeutic implications—. In Blos, P., *The Adolescence Passage —developmental issues—*, International Universities Press.
- Coffield, K.E. 1981 Student apathy —a comparative study—, *Teaching of Psychology*, 8, 26—28.
- Coffield, K.E., & Buckalew, L.W. 1985 University student apathy —sex, race, and academic class variables—, 35(4), 459—463.
- Coffield, K.E., & Buckalew, L.W. 1986 Student apathy —an analysis of relevant variables—, *College Student Journal*, 20(2), 211—214.
- Cohen, D.A. 1991 Overcoming student apathy and bewilderment —setting an example of responsibility and attentiveness—, *Proteus*, 8, 27—29.
- Davison, G.C., & Neal, J.M. 1994 *Abnormal psychology* (6th ed), John Wiley & Sons.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and The Life Cycle* International University Press. (エリクソン 小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房)
- 遠藤辰雄 1972 留年学生をめぐって —原因と対策— 厚生補導, 72, 2—9.
- Farnsworth, D.L. 1973 Mental health programs in colleges. Arieti, S.(ed) *American Handbook of Psychiatry*, 2nd Edition vol2, Pp.773—785.
- 深谷昌志 1990 無気力化する子どもたち 日本放送出版協会
- Gibbons, R.D., Lewine, R.R., Davis, J.M., Schooler, N.R., & Cole, J.O. 1985 An empirical test of a Kraepelinian vs a Bleulerian view of negative symptoms, *Schizophrenia Bulletin*, 11(3), 390—396.
- Gimenez, M.E. 1989 Silence in the classroom —some thoughts about teaching in the 1980s—, *Teaching Sociology*, 17(2), 184—189.
- Glauber, I.P. 1949 Observation on a primary form of anhedonia, *Psychiatric Quarterly*, 18, 67—78.
- Grayson, P.A., & Gauley, K.(ed) 1989 *College psychotherapy*, The Guilford Press.
- Grinker, R.R., & Holzman, P.S. 1973 Schizophrenic pathology in young adults —a clinical case study—, *Archiv Genetic Psychiatry*, 28, 168—175.
- 波多野誼余夫・稲垣佳世子 1981 無気力の心理学 —やりがいの条件— 中央公論社
- Halleck, S.L. 1967 Psychiatric treatment of the alienated college student. *American Journals of Psychiatry*, 124(5), 96—104.
- Harrow, M. 1977 Anhedonia and schizophrenia, *American Journal of Psychiatry*, 134(7), 794—797.
- 長谷川浩 1980 スチューデント・アパシー 大原健士郎・岡堂哲雄(編) 思春期・青年期の異常心理 新曜社 Pp.144—157.
- 林 昭仁 1990 スチューデント・アパシーへの対応 —来談者中心療法的アプローチ— 土川隆史(編) スチューデント・アパシー 同朋舎 Pp.199—215.
- 樋口和彦 1980 ポスト・スチューデント時代 笠原嘉・山田和夫(編) 1980 キャンパスの症状群 弘文堂 Pp.253—283.
- 平井富雄(監修) 1987 現代人の心理と病理 サイエンス社
- 広瀬徹也 1977 「逃避型抑うつ」について 宮本忠雄(編) 躁うつ病の精神病理 2 弘文堂 Pp.61—86.
- Holland, J.L., & Holland, J.E. 1977 Vocational indecision —More evidence and speculation,

- Journal of Counselling Psychology*, **24**, 404—414.
- Holland, J.L., Gottfredson, D.C., & Power, P.G. 1980 Some diagnostic scales for research in decision making and personality —Identity, information and barriers—, *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 1191—1200.
- 細江達郎・鳥山平三・藤井 虔・土川隆史・粕中 達 1977 Student Apathy をめぐって 全国学生相談研究会報告書 (東京大学), 2—34. (石井・笠原 (1981) Pp.116—148 に再録)
- 細木照敏 1976a スチューデント・アパシーについて 教育と医学, **24**, 264—269.
- 細木照敏 1976b 留年学生について 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) 青年期の精神病理 1 弘文堂 Pp.201—216.
- 池田博和 1988 STUDENT APATHY の一事例 (上) —「青年期危機」論の視点からの検討— 心理臨床一名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要, **3**, 123—136.
- 池田博和 1989 STUDENT APATHY の一事例 (下) —「青年期危機」論の視点からの検討— 心理臨床一名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要, **4**, 11—23.
- 稲村 博 1985 黙示録 2025 年 —青少年アパシーは戦慄のサイン— 朝日出版社
- 稲村 博 1988 若者・アパシーの時代 —急増する無気力とその背景 日本放送出版協会
- 石井完一郎 1975 高学歴社会における学生の無気力の諸相について —疎外との関連における心理社会的分類試論— 京都大学学生懇話室紀要, **5**, 16—43.
- 石井完一郎 1979 長期留年の末に —「五十円玉使ってから」(自殺念慮 B 例)— 石井完一郎 青年の生と死の間 弘文堂 (石井・笠原 (1981) Pp. 105—111 に再録)
- 石井完一郎 1981 大学大衆化時代におけるスチューデント・アパシーについて —「キャンパス特有の無気力」を展望して— 石井完一郎・笠原嘉 (編) スチューデント・アパシー (現代のエスプリ NO168) 至文堂 Pp.5—23.
- 石井完一郎・笠原 嘉 (編) 1981 スチューデント・アパシー (現代のエスプリ NO168) 至文堂
- 岩井 寛・天本 宏・伊丹 昭 1977 新たな不登校現象の症例と理論 季刊精神療法, **3**(3), 272—277.
- Jacewicz-Kramar, H., & Warnecka-Przybylska, M. 1982 Przyczynę do dyskusji nad etiologia zespołów apatycznych-abulicznych, *Psychiatria Polska*, **16**, 145—150.
- 蔭山英順 1988 スチューデント・アパシー 西村直喜・久世敏雄 (編) 青年心理学ハンドブック 福村出版 Pp.819—831.
- Kantor, M. 1992 Diagnosis and treatment of the personality disorders. Ishiyaku EuroAmerica Inc.
- 笠原 嘉 1973 現代の神経症 —神経症性 apathy (仮称) について 臨床精神医学, **2**(2), 153—162. (笠原 (1984) に再録)
- 笠原 嘉 1976 精神科医ノート みすず書房
- 笠原 嘉 1977 青年期 —精神病理学から— 中央公論社
- 笠原 嘉 1978 退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱 中井久夫・山中康裕 (編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版 Pp.287—319. (笠原 (1984) に再録)
- 笠原 嘉・成田善弘 1979 アパシー・シンドロームをめぐって 精神医学, **21**(6), 585—591. (笠原 (1984) 再録)
- 笠原 嘉・山田和夫 (編) 1980 キャンパスの症状群 弘文堂
- 笠原 嘉 1981 スチューデント・アパシー第三報 石井完一郎・笠原嘉 (編) スチューデント・アパシー (現代のエスプリ NO168) 至文堂 Pp.24—28. (笠原 (1984) に再録)
- 笠原 嘉・三好暁光 1981 大学生にみられる精神病とノイローゼ 笠原嘉・山田和夫 (編) キャンパスの症状群 弘文堂 Pp.11—142. (笠原嘉 (1984) に再録)
- 笠原 嘉 1983 不安・ゆううつ・無気力 —正常と異常の境目— 飯田真他 (編) 講座精神の科学 3 精神の危機 岩波書店 Pp.207—260.
- 笠原 嘉 1984 アパシー・シンドローム —高学歴社会の青年心理— 岩波書店
- 笠原 嘉 1988 退却神経症 —無気力, 無関心, 無快楽の克服— 講談社
- 加藤雄一 1990 いわゆるスチューデント・アパシーについての臨床的検討 —N大学における— 名古屋大学学生相談室紀要, **2**, 25—35.
- 河合隼雄 1976 母性社会の日本の病理 中央公論社
- 国分康孝 1980 スチューデント・アパシー 青年心

- 理, 23, 859—866.
- 駒米勝利 1987 女子大生のスチューデント・アパシー 平井富雄(監修) 1987 現代人の心理と病理 サイエンス社 Pp.334—341.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551—558.
- Marcus, S.T., & Richman, P.J. 1977 Overcoming student apathy, *Social Education*, 41(7), 645—646.
- Marin, R.S. 1990 Differential diagnosis and classification of apathy, *American Journal of psychiatry*, 147, 22—30.
- Marin, R.S. 1991 Apathy : a neuropsychiatric syndrome. *Journal of Neuropsychiatry & Clinical Neurosciences*, 3(3), 243—254.
- Marin, R.S., Biedrzycki, R.C., & Firinciogullari, S. 1991 Reliability and validity of the apathy evaluation scale. *Psychiatry Research*, 38, 143—162.
- Marin, R.S., Firinciogullari, S., & Biedrzycki, R.C. 1993 The sources of convergence between measures of apathy and depression, *Journal of Affective Disorders*, 28, 7—14.
- 丸井文男 1967 大学生のノイローゼ —意欲減退症候群— 教育と医学, 15, 476—483.
- 丸井文男 1968 留年学生に対する対策 厚生補導, 22, 18—24.
- 松原治郎 1980 管理社会と青年 大原健士郎・岡堂哲雄編 講座異常心理学 3 思春期・青年期の異常心理 新曜社
- 松原達哉 1985a 行動分析的カウンセリング研究(1) —Student Apathy— 筑波大学心理学研究, 7, 87—94.
- 松原達哉 1985b Student Apathy の生活分析的カウンセリング 相談学研究, 18, 1—15.
- 松原達哉 1990 スチューデント・アパシーへの対応 —生活分析的アプローチ— 土川隆史(編) スチューデント・アパシー 同朋舎 Pp.215—233.
- 松原達哉 1992 生活分析的カウンセリング(LAC法) —無気力から意欲への脱出法— (冊子)
- 松原達哉 1993 Student apathy の特徴と研究の動向 カウンセリング研究, 26(2), 163—177.
- Meyersohn, R. 1974 What is apathy? Center-point, 1, 90—92.
- 水口禮治 1985 無気力からの脱出 福村出版
- 湊 博昭 1990 学校と青年期 スチューデント・アパシー 臨床精神医学, 19(6), 855—860.
- 峰松 修 1990 スチューデント・アパシーへの対応 —来談学生への一般的対応— 土川隆史(編) スチューデント・アパシー 同朋舎 Pp.180—199.
- 宮田加久子 1991 無気力のメカニズム —その予防と克服のために— 誠信書房
- 三好暁光 1983 アパシーと生きがい 季刊精神療法, 9, 24—29.
- 森岡正芳 1981 アパシー状態にある男子大学生の事例 —「おとなになれない」青年— 臨床心理事例研究(京都大学教育学部), 8, 75—83.
- Mundt, C. 1983 Das Residuale Apathiesyndrom der Schizophrenen —Ergebnisse einer psychopathologischen Langzeitstudie, *Nervenarzt*, 54, 131—138.
- 中安信夫 1990 初期分裂病 星和書店
- 楡木満生 1993 スチューデント・アパシーと自我同一性 日本教育心理学会第35回大会発表論文集, 35.
- 延島信也(編) 1989 サラリーマン・アパシー 同朋舎
- 織田尚生 1986 ユング心理学の実際 誠信書房
- 小田 晋 1991 子どものアパシーとは何か 教育心理, 39(2), 90—95.
- 小川豊昭 1992 スチューデント・アパシー —ナルシズム論からの力動的理解— 若林慎一郎(編) 青年期の病理と治療 金剛出版 Pp.117—142.
- 岡田隆介他 1988 背景要因の変化による不登校4態(登校拒否, 生徒アパシー, 怠学, 非行)の移動・移行について 臨床精神医学, 17(2), 263—269.
- 岡庭 武 1983 大学生神経症研究班報告 —student apathy のまとめ— 第4回精神衛生研究会報告書, 36—40.
- 岡庭 武 1984 大学生神経症研究班報告 —student apathy のまとめ, その2— 第5回精神衛生研究会報告書, 77—80.
- 岡庭 武 1985 大学生神経症研究班報告 —student apathy のまとめ, その3— 第6回精神衛生研究会報告書, 19—22.
- 小此木啓吾 1979 モラトリアム人間の心理構造 中央公論社
- 小野従道 1987 スチューデント・アパシーの内的世界 季刊精神療法, 13(4), 375—383.

- 大井正巳 1979 思春期のうつ病とその周辺, 社会精神医学, 2(4). (石井・笠原 (1981) Pp.57-65.に再録)
- 大井正巳 1990 従来の精神医学的カテゴリーとの鑑別 土川隆史(編) スチューデント・アパシー 同朋舎 Pp.67-94.
- Osipow, S.H., Carney, C.G., & Barak, A. 1976 A scale of educational-vocational undecidedness —A typological approach—, 9, 233-243.
- Perkins, D.S. 1975 Aspect of student discontent-1975. *Journal of Higher Education*, 46(4), 471-477.
- Revers, V.W.J. 1983 Die Langeweile-Symptom emotionaler Verkummerung *Zeitschrift für Klinische Psychologie, Psychopathologie und Psychotherapie*, 31, 4-13.
- Robinson, T.N., & Walters, P.A.J. 1986 Health Net —an interactive computer network for campus health promotion—. *Journal of American college health*, 34(6), 284-285.
- 佐治守夫 1976 学生のアパシー現象 佐治守夫・福島章・越智浩二郎(編) ノイローゼ —現代の精神病理— 有斐閣 Pp.193-206.
- 坂野雄二 1989 無気力・引っ込み思案・緘黙 黎明書房
- 桜井茂男 1995 「無気力」の教育社会心理学 —無気力の発生するメカニズムを探る— 風間書房
- Schneider, K. 1950 Die psychopathischen Persönlichkeiten. Fr. Deuticke. (シュナイダー 懸田克躬・鱒崎轍(訳) 1954 精神病質人格 みすず書房)
- Schneier, F.R., Spitzer, R.L., Gibbon, M., Fyer, A.J., & Liebowitz, M.R. 1991 The relationship of social phobia subtypes and avoidant personality disorder, *Comprehensive Psychiatry*, 32(6), 496-502.
- Seligman, M.E.P. 1975 Helplessness —On depression, development, and death—. Freeman. (セリグマン 平井久・木村駿(訳) 1985 うつ病の行動学 誠信書房)
- 島崎素吉・竹内龍雄 1981 いわゆる student apathy について —筑波大学での経験から— 第2回大学精神衛生研究会議報告書, 99-106.
- 下山晴彦 1982 高校生的人格発達と進路決定 —テストバッテリーを用いての縦断的事例研究—, 東
京大学教育学紀要, 22, 211-222.
- 下山晴彦 1983 高校生的人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究 教育心理学研究, 31, 157-162.
- 下山晴彦 1984 ある高校の進路決定過程の縦断的研究 教育心理学研究, 32, 206-211.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 下山晴彦 1992 モラトリアムの下位分類の研究 —アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 下山晴彦 1994a つなぎモデルによるスチューデント・アパシーの援助 —「悩めない」ことを巡って— 心理臨床学研究, 12, 1-13.
- 下山晴彦 1994b 保健管理センターにおける心理相談の現状 —臨床心理士の立場からみたスチューデント・アパシーの問題を中心に— 東京工業大学保健管理センター年報, 60-66.
- 下山晴彦 1995a 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 下山晴彦 1995b スチューデント・アパシーの構造の研究 —モデル構成現場心理学の試みとして— 心理臨床学研究, 13(3), 252-265.
- 新福尚武 1984 アパシー 新福尚武(編) 精神医学大辞典 講談社 Pp. 44.
- 新宮一成他 1981 大学生の精神病理とその診断 京都大学学生懇話室紀要, 11, 15-25.
- Slanley, R.B., Stafford, M.J., & Russell, J.E.A. 1981 An investigation of two measures of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 18, 92-103.
- 菅佐和子・大原 貢 1983 アパシー状態にあった青年の面接過程 —夢, 箱庭などを併用して— 季刊精神療法, 9, 59-70.
- 鈴木研二 1978 現代無気力考 茨城キリスト教大学紀要, 12, 9-20.
- 田中 哲・笠原敏彦 1988 恐怖症・強迫症を伴う思春期男子の無気力状態について 児童青年精神医学とその近接領域, 29(5), 319-325.
- 田中千穂子他 1990 アパシー尺度作成の試み (第一報) —TPIによる検討— 心の健康, 5, 67-76.
- Taylor, M.E., & Wolford, C.A. 1985 Sexuality and the disabled —apathy on the campus—, *Journal of American college Health*, 34, 34-36.
- Teicher, J.D. 1972 The alienated, older, isolated

- male adolescent, *American Journal of Psychotherapy*, **26**, 401-407.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— *教育心理学研究*, **41**, 200-208.
- 東京都立教育研究所相談部 教育相談研究室 1987 思春期における無気力状態の解明に関する研究
- 辻 悟 1973 青年期における主体の硬直的な退去とその現代的背景—不登校, いわゆる Apathie を中心に— *精神医学*, **15**(12), 1279-1289.
- 土川隆史 1974 意欲減退学生について *厚生補導*, **95**. (石井・笠原 (1981) Pp.71-77.に再録)
- 土川隆史 1981 スチューデント・アパシー 笠原嘉, 山田和夫 (編) キャンパスの症状群 弘文堂 Pp.143-166.
- 土川隆史 1985 スチューデント・アパシーと生活のリズム *教育心理*, **33**, 771-773.
- 土川隆史 1988 神経症とその周辺のパーソナリティ・アセスメント *臨床精神医学*, **17**, 11-16.
- 土川隆史 1989 大学生のアパシー—スチューデント・アパシー再検討— 清水将之 (編) 青年期の精神科臨床 金剛出版 Pp.227-239.
- 土川隆史 (編) 1990a スチューデント・アパシー 同朋舎
- 土川隆史 1990b スチューデント・アパシーの輪郭 土川隆史 (編) スチューデント・アパシー 同朋舎 Pp.1-65.
- 土川隆史 1992 アパシー学生への援助技法 全国学生相談研究会議 (編) キャンパスでの心理臨床 至文堂 Pp.132-143.
- 上地安昭 1979 学生の意欲減退 藤土圭三 (編) 現代学生の精神衛生—若者指導のためのハンドブッカー 北大路書房 Pp.113-126. (石井・笠原 (1981) に再録)
- von Franz, M.-L. 1970 The problem of the puer aeternus Spring Publications. (フォン フランツ 松代洋一・椎名恵子 (訳) 1982 永遠の少年—「星の王子さま」の深層— 紀国屋書店)
- Walters, P.A.J. 1961 Student Apathy Blaine B. Jr. & McArthur C.C. (ed) Emotional Problem of the Student Appleton-Century-Crofts. 笠原嘉, 岡本重慶 (訳) 1975 学生のアパシー 石井完一郎他 (監訳) 学生の情緒問題 文光堂 Pp.106-120.
- Walters, P.A.J. 1970 Depression *Psychiat. Clinic*, **7**, 169-179.
- Widiger, T.A. 1992 Generalized social phobia versus avoidant personality disorder—a commentary on three studies—, *Journal of Abnormal Psychology*.
- 矢花美美子 1986 無気力なこども—浪人, 留年を中心に— 藤原豪 (編) 精神科 MOOK14 青少年の病理 金原出版 Pp.146-155.
- 山田和夫 1983 成熟拒否—大人になれない青年たち— 新曜社
- 山田和夫 1984 アパシーと父性 *精神療法*, **10**(2), 149-154.
- 山田和夫 (編) 1986 20代の心理と病理—ヤングアダルトをどう理解する?— 千曲出版社
- 山田和夫 1987 スチューデント・アパシーの基本病理—長期縦断的観察の60例から— 平井富雄 (監修) 現代人の心理と病理 サイエンス社 Pp.355-373.
- 山田和夫 1989 境界例の周辺—サブクリニカルな問題性格群— *精神療法*, **15**(4), 350-360.
- 山田和夫 1990a 家族関係の中でのスチューデント・アパシー 土川隆史 (編) スチューデント・アパシー 同朋舎 Pp.140-177.
- 山田和夫 1990b 現代青少年の病理—サブクリニカルな問題性格群— *こころの健康*, **5**, 2-16.
- 山本由子 1975 精神障害といわゆる怠学 *心と社会*, **6**, 56-66.
- 山下一夫 1990 アパシー青年のカウンセリング 河合隼雄 (編) 事例に学ぶ心理療法 日本評論社 Pp.209-251.

(1995.12.11 受稿, '96.5.18 受理)